

平成30年度 南河内第二中学校区小中一貫教育グランドデザイン

〈長期ビジョン〉

夢と希望をもち、たくましく未来を拓く児童生徒の育成

- 1 自主的に学び、主体的に問題を解決しようとする子どもを育てる。
- 2 豊かな情操と道徳性を備え、礼儀正しい子どもを育てる。
- 3 自己の生命・人権を尊重し、強い意志と健康な身体をもつ子どもを育てる。
- 4 勤労・奉仕の精神を理解し、すすんで社会のためにつくそうとする子どもを育てる。
- 5 郷土の文化と伝統・自然に誇りをもち、自信をもつて（国際）社会で活躍できる資質を備えた子どもを育てる。

- ＝下野市小中一貫教育の方針＝**
- 9年間の学びをつなぎ、確かな学力、健やかな体の育成を保障します。
 - 9年間の一貫した児童生徒理解により、子どもたちが安心して学ぶ場を提供します。
 - 郷土への理解を深め、ふるさとを愛する心を育てる教育活動を推進します。
 - 「学校運営協議会」の導入により、地域とともにある学校づくりを推進します。

＝地域の様子＝
本地区は、自治医科大学および大学附属病院の開業、自治医大駅の新設により、急速に発展した地域である。地域住民は、医療関係者、会社員、公務員の占める割合が高い。地域や保護者の学校教育への関心は高く、協力的である。

＝児童生徒の様子＝
知的好奇心が高く、学習態度は良好で、課題に対し熱心に取り組むことができる。また、礼儀正しく落ち着いた生活態度で学校生活を送っている。

まなび

基礎・基本を定着させ、児童生徒の主体性を引き出します。

- 9年間を見通した教育計画の推進
- 3校での授業研究（重点教科：理科）
- 学力調査の分析を生かした授業改善
- 思考過程の見えるノートづくり
- 小中教員の相互乗り入れ授業
- 家庭学習の定着と充実



理科の授業



相互乗り入れ授業

〈目指す子ども像〉

- 〈まなび〉 主体的に考え、学び合いを通して互いに高め合える子ども
- 〈こころ〉 思いやりの心をもち、自他を大切にできる子ども
- 〈からだ〉 心身の健康に関心をもち、たくましく実践できる子ども
- 〈ちいき〉 社会に貢献し、地域に主体的に参画しようとする子ども

〈組織図〉



こころ

自他ともに思いやりの心をもって接する児童生徒を育てます。

- 挨拶の習慣化と望ましい人間関係づくり
- 道徳教育の充実
- 交流活動を通じた自己有用感の育成
- 読書活動の推進



道徳の授業



小中交流あいさつ運動

からだ

心身の健康に対する関心と体力の向上を目指します。

- 正しい姿勢の定着
- 学校栄養職員と連携した食育
- 養護教諭と連携した保健指導
- 体力づくりの充実



体力づくり



食育授業

ちいき

保護者や地域と連携して、地域への愛着を育てます。

- 児童会・生徒会によるボランティア活動
- 小中合同のクリーン活動
- 地域行事への参加・協力(エコライフまつり)
- 地域ボランティアによる体験活動とキャリア教育の充実



むかし遊び



クリーン活動

＝各学校の学校教育目標(目指す児童生徒像)＝

南河内第二中学校

- 人間性豊かで、意欲あふれる二中学生
1 自ら考え学ぶ生徒 (確かな学力)
2 思いやりのある生徒 (豊かな人間性)
3 体力と気力をきたえたる生徒 (健康・体力)
知・徳・体の調和のとれた教育で「生きる力」を育成



祇園小学校

- 新しい時代に共にによりよく生きようとする、心身ともに健康で、知性に富み、情操豊かな子どもの育成
○健康で明るい子
○進んで学ぶ子
○心の豊かな子



緑小学校

- 自ら考え、主体的に行動できる心豊かな子どもの育成
○学び合う子
○思いやる子
○きたええる子



児童・生徒数

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	中1	中2	中3	合計
南河小	51	52	61	60	53	62				339
緑小	31	47	31	48	42	39				238
南二中							116	98	123	337
合計	82	99	92	108	95	101	116	98	123	914

南河内第二中学校区

【目指す子ども像】

- 主体的に考え、学び合いを通して互いに高め合える子ども
- 思いやりの心を持ち、自他を大切にできる子ども
- 社会に貢献し、地域に主体的に参加しようとする子ども

【重点項目】

- 深い学びのための活動を充実させる。
- とちぎっ子学習状況調査結果を活用して、学力向上を図る。
- 総合的な学習の時間のカリキュラムを整備することによって地域の教育資源を生かし、ふるさとへの愛情を醸成し、地域への参画力を育成する。

夢と希望をもち、たくましく未来を拓く児童生徒の育成を目指し、「まなび」「こころ」「からだ」「ちいき」の4つのテーマを設定した。テーマに基づき、小中学校の全教職員が①道徳②授業研究③深い学び④学業指導⑤総合カリキュラム⑥心身の健康、の6つの部会に分かれて、9年間を繋ぐ教育活動の充実に向けて研修を重ねた。

各部会の取組

<道徳チーム>

【児童生徒の実態】

<小中共通している実態> 話し合い活動に入る前から、道徳的価値に対する“模範的な考え”を用意してしまう。道徳的価値の大切さは理解できても、実践が伴っていない。
 <中学校の実態> 価値に対する考えを持って、発表する生徒が少なく、議論に至らない。

【部会のねらい】

《「考え議論する道徳」の実践を目指す》 児童生徒が活発に議論し合い自分の考えを深めるとともに、学んだ道徳的価値を道徳実践力に結び付けていくようにする指導法について研究する。

【部会の取組】

視 点	取組の具体(P・D)	成果	課題
 教育活動の 連続性の確保			・本年度は、道徳科の枠内での取組だった。道徳教育全体の中での小中のつながりも考えなければならぬ。
<C> 教職員間の 連続・協働	・小中それぞれで使用している教科書・副読本や、教具類、ワークシート等を持ち寄って、使用状況を把握する。 ・授業での指導法について情報交換をする。 ・道徳の授業を参観し合い、指導法や評価法について協議する。協議内容を、自校に提供する。 ・所見の書き方についての情報交換をする。(参考例の持ち寄り等) ・第2回～第5回小中一貫研修会の協議内容により実践状況を評価する。 ・課題について検証し、改善案を立て、改善に努める。	・他校の具体的な取組が分かり、大変参考になった。各校で使用しているワークシートや資料は、自校の職員に紹介したり、研究授業に生かしたりすることができた。 ・各校の道徳部の研修内容が分かり、自校の研修にも取り入れることができた。 ・「テーマ発問」から始まる授業展開を小中で共有し実践したことが指導力向上につながった。 ・評価方法の意見交換をし、より具体的な方法と所見文例を得ることができた。	・協議することは大切である。しかし、検討するには、全体が集まる時以外に時間が取れないのが現状である。 ・指導案検討の機会等があれば、相互参観の際、授業の視点がはっきりして参観できただろう。なんとなく終わった感があつた。 ・部員が小中一貫研修会以外の研修で得られた情報も、自校だけでなく、どんどん発信していけるとよい。 ・評価については、成果であり課題でもある。どのように評価を書いたらよいか、文例などについての情報交換は続けて欲しい。 ・児童生徒の道徳授業に対する捉え方が違うように感じた。小学校の授業の工夫やよさが中学校につながらない。この部会をやればやるほど、難しさを感じた。いろいろな先生に授業を見て欲しい。 ・保護者対象の学校評価の結果を生かして、学区の児童生徒が共通して落ちている価値項目を洗い出したり、その価値について研究したりしていくということも考えられる
<D> 家庭・地域との 連携・協力			・「思いやり週間」や「道徳の日」を設定し、家族で話し合う機会をもってもらったり、授業参観に全員が道徳の授業をしたりして保護者への啓発を図るとよい。

<授業研究チーム>

【児童生徒の実態】

- ・理科に興味のある児童・生徒が多いが、予想や考察のときに自分の体験や既習の実験結果を根拠に示すことを苦手としている。
- ・住宅地に囲まれ、自然と触れ合う機会が少ない。

【部会のねらい】

- ・自分の体験や既習の実験を根拠に科学的な思考を深めることができる児童生徒を育てる。

【部会の取組】

視 点	取組の具体(P・D)	成果	課題
<A> 教育課程の 工夫改善	・小学校低学年の生活科でも、理科とつながる自然体験や観察を充実させるよう年計に位置付ける。 ・予想を考えるのに根拠となる体験や既習事項を積み重ねられるよう、重点事項を年計に位置付ける。 ・年計に位置付けられた重点項目について、実施したのについて第3回～6回の小中一貫研修会で協議・検討し、改善を加える。	・小中6年間を通じた理科の内容の構造化を図るために、「生命」「地球」「エネルギー」「粒子」という4つの内容区分を柱として系統性、関連性をまとめた表により、二中学区で課題となる内容について焦点化して取り組めた。 ・学力テストの分析結果、日頃の授業の指導で困っていることを小中で共有することで重点項目が絞られた	・重点教科を決めると指導の共通化、学力向上への手立てとして有効だが、中学校は他教科の先生への広がりという点は難しい。
<C> 教職員間の 連続・協働	・授業での指導方法について情報交換し、共通理解を図り、それぞれの指導が連続するよう指導の重点事項を確認する。 ・重点化して取り組む実験・体験項目について、実施したものを第3回～6回の小中一貫研修会で協議・検討し、改善したり、さらに必要と思われる項目を加えたりする。	・授業を互いに参観することにより、指導方法の共有、情報交換、課題の確認が進んだ。 ・夏休みに天体について研修し、専門家の指導を受けられたのは有意義だった。	・今回の取組を意味のあるものにするためにも、データ等にまとめて引き継ぐとともに、来年度以降も継続的な取組が必要。 ・お互いの授業を見た後話し合う時間が設けられるとよい。

<深い学びチーム>

【児童生徒の実態】

・黒板を写すことにはよく取り組むが、ノートに友達の考えをメモしたり自分の考えを詳しくまとめたりすることについては、まだ十分に身に付いているとはいえない。

【部会のねらい】

・「深い学び」につなげるために、思考の流れを記録したり書きながら思考したりするようなノートの型やノート指導について研究する。

【部会の取組】

視 点	取組の具体(P・D)	成果	課題
<A> 教育課程の工夫改善	・「主体的・対話的で深い学び」について共通理解する。	・県教委の資料や先進校の資料を活用し、理解に役立てることができた。	・まず、話し合いを充実させるための教科毎の指導法を明らかにしたい。次に、連続した問いをもつような指導法について研究したい。
 教育活動の連続性の確保	・ノートの型や指導法について、小中、小小連携できるものを明らかにし、担当する授業で実践する。同じ教科の小-中間、小-小間で継続させるべきこと同一単元で共通に指導したこと。	・小中の児童のノートを持ち寄り、検討した。小学校の取り組みを理解し、中学校で生かそうという気持ちが醸成された。	・学習過程とノートの関連で、どう思考を連続させ深めるのか、具体的に共通して取り組むことができるかどうか。
<C> 教職員間の連続・協働	・担当する授業でのノートの型や指導法について研究・実践し、事例を持ち寄る。	・どの教科でも、ノート指導はあるので、お互いの実践を知り、個人として取り入れたことがいくつかあった。例)国語の振り返りを原稿用紙に指定字数で書かせる。	・ノート指導がどう学力向上に役立っているのか、長期的に研修・実践しなければならない。短期的には答えを出すことが難しい。「深い学び」は、最終的などころと考えられる。

<学業指導部会>

【児童生徒の実態】

・高い学力が身についた児童生徒が多く、各種学力調査の結果は良好である。反面、テスト等の結果主義(点数主義)的な児童生徒や保護者が少なくない。そのために、高い学力を示す結果であるにもかかわらずより以上の成果を求められ、自己肯定感が低ったり、実験・観察などを自ら行おうとする主体性や自らの知識技能では簡単に解決できない課題に粘り強く取り組もうとする意欲に課題があったりする。

・また、高い学力を有する児童生徒の割合が多い一方で、能力差に応じた手立てを要する児童生徒への配慮が必要である。

【部会のねらい】

・毎年行われる全国学力調査ととちぎっ子学力調査の、意欲・態度や学習習慣などに関わる結果を分析・共有し、小中で連携・協力して解決していきたい課題を明らかにする。
・家庭学習の働きかけを通して、家庭とも連携し、家庭での学習習慣を身に付けさせながら学習への意欲付けを図り、自己の学力や学習意欲に自信や肯定感をもてるような、学校・家庭それぞれの望ましい関わり方を考えていく。

【部会の取組】

視 点	取組の具体(P・D)	成果	課題
 教育活動の連続性の確保	・全国学力調査やとちぎっ子学力調査で小中にかけて実施する課題を明らかにし、課題解決のために家庭学習でも一貫して働きかけていく。 ・家庭学習強調週間の実施と、そこで児童生徒に継続して振り返らせたい内容項目を検討する。	・昨年度の取組を継続し、中学校のテスト期間に合わせて家庭学習強調週間を実施できた。その中で、緑小と祇園小で家庭学習カードの型をそろえて共同歩調で実施できた。 ・3校に共通する児童生徒の課題や中1ギャップの実情について確認し合えた。その課題に対する小中でのお互いの学習指導の取組について知ることができ、それぞれの指導の参考にすることができた。	・授業や学級経営に関わる「学業指導」や「学級力」の向上について検討し合ったり具体的な取組を考えたりすることはできなかった。学業指導については、学び合いの視点で捉えるのか、児童指導的な人間関係や新しい集団(環境)への適応の問題として捉えるのか、その視点の置き方で今後の部会のあり方も検討する必要がある。
<D> 家庭・地域との連携・協力	・中学校の定期テスト前の学習期間に合わせて家庭学習強調週間を同時に実施し、各児童生徒が家庭学習の取り組み方(習慣・意欲)や学力を見直す機会として、保護者からも子どもの学習の様子を認め励まし、さらに意欲や自信、自己肯定感を高める機会としてもらう。	・家庭学習強調週間については、趣旨を理解し協力的に取り組んでくれた家庭がほとんどだった。 ・今年度は各児童生徒に「めあてをもって家庭学習に取り組む」という項目を設定した振り返りカードを用いたが、めあてをもち意欲的継続的に頑張れるよう、励ましや肯定的な言葉かけをしてくれる保護者の割合が増えている。	・家庭学習強調週間については定着しているもので、今後も継続して実施して行けそうである。中学校の定期テストに合わせて回数も増やしたい。(本年度は下記の第3・4回の家庭学習強調週間のみ実施) ・今年度は振り返りカードに「めあて」を記入し意識させた。「めあてに向けて継続する力」「時間を決めて家庭学習を行い、学習・生活を律する力」「自学自習で取り組む教科や内容を工夫し、幅広い学力を付ける力」などについて、何年かおきに違った視点と入れ替えながら意識付けていけるとよい。

<総合カリキュラム部会>

【児童生徒の実態】

・小学校・中学校ともに「総合的な学習の時間」の中で、自分でテーマを決めてその課題を追究する活動を行っている。また、地域人材を生かした活動を授業等に取り入れ、地域の人々と様々な形で交流している。

【部会のねらい】

・「総合的な学習の時間」について、小学校・中学校の9年間をつなぐカリキュラムを作成し、カリキュラムの可視化を目指す。

【部会の取組】

視 点	取組の具体(P・D)	成果	課題
 教育活動の連続性の確保	・9年間を結ぶ「総合的な学習の時間」のカリキュラムを作成する。(祇園小・南河二中/緑小・南河二中) ・カテゴリ別カリキュラムを作成し、カリキュラム毎の小・中学校9年間のつながりを可視化する。	・カリキュラム作成に当たり、計画的かつ効率よく作業が進められた。 ・所属学年や他学年、他校の活動を理解し、発達段階を踏まえた深化や系統性について把握できた。	・時間をかけて作成した成果物を今後どう生かすか。 ・小・中間で単元をつなぎ、どのように発展させていけるか。 ・実施時期のズレをどうするか。
<D> 家庭・地域との連携・協力	・小・中学校9年間に及ぶ地域人材活用状況を表にまとめ、可視化する。	・2つの小学校の年計がほぼ同じで、同時期に地域人材を活用していることが分かった。 ・地域人材の活用において重複を避け内容を精選することができた。	・地域及び保護者に9年間のカリキュラムを示してはどうか。また、その際どのような記載の仕方をすれば、一般の方にも分かりやすくなるのか。

<心身の健康チーム>

<p>【児童生徒の実態】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者の健康や食への意識や関心は全体的に高いが、あまり関心が高くない家庭も一部に見られる。 ・姿勢については、小学生は60%、中学生は75%で、保護者も60%で姿勢が悪いと感じており、特に勉強や読書をしているとき、食事をしているときに姿勢が悪い。保護者の81%が姿勢について声かけているなど関心が高いが、正しい姿勢の定着には課題がある。 ・朝食については、朝食の摂取率は高いが、主食だけなど、朝食の内容に課題のある児童生徒もみられる。 <p>【部会のねらい】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・正しい姿勢の定着については、小学1～4年生については「べったんびんぐうば一ふたつ」、5、6年と中学生については「立腰」の言葉で統一した指導ができるように教材を作成し、各学校での指導に生かす。 ・朝食については、毎日朝ごはんを食べてくことや、朝ご飯の内容を充実しようとする意識を高めていく。
--

【部会の取組】			
視 点	取組の具体(P・D)	成果	課題
 教育活動の連続性の確保	<ul style="list-style-type: none"> ・小学1～4年生は「べったんびんぐうば一ふたつ」5、6年と中学生は「立腰」の言葉で統一して指導。 ・共通する掲示物、指導資料の整備。 ・「朝ごはん毎日食べよう週間」での活動と毎日の振り返りカードの実施。 ・10月に行う市統一での朝ごはんアンケートの実施と分析。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校区での正しい姿勢について統一し、掲示物や各学校での指導ができた。 ・朝ごはん食べよう週間の統一と実施ができた。 ・朝ごはんアンケートでは、毎日食べる・だいたい食べる児童を合わせて97%であった。主食+おかずを食べてくる児童・生徒が増えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導時期について ・継続指導の工夫
<C> 教職員間の連続・協働	<ul style="list-style-type: none"> ・各学校の学校保健給食委員会に養護教諭、栄養士が参加し、二中学区の健康問題についての共通理解を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校保健給食委員会に参加することで、各学校の課題や共通で指導していく課題が見えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・見えてきた課題への対応について
<D> 家庭・地域との連携・協力	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケート(姿勢) ・心身の健康チームとしての「二中学区健康だより」の作成。 ・振り返りカードによる記録や保護者からのコメントを通して家庭との連携を強化。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケートから姿勢について家庭での困り感を知ることができた。 ・年間2回の健康だよりの作成、配布ができた。 ・保護者からのコメントを頂くことで、保護者の考え方や工夫を知ることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭との更なる連携について

成果と課題

- ◎成果
- ・小中の職員で構成する各部会で話し合ったりグランドデザインについて検討したりすることで、児童生徒の9年間を通しての実態について理解を深めた。小中を繋いだ9年間を見通した教育活動をイメージしたり、その中で各自が担当する学年や発達段階にある児童生徒の指導について捉え直したりすることができた。
 - ・3校が近距離にあるという利点を生かし、部会ごとに授業研究の機会を頻繁にもつことができた。それにより、小中それぞれに、小学校の指導法や教材作りを中学校で生かせないかと考えたり、中学校での生徒の活動の様子を見て中学校へのつなぎや小学校で育てておきたい資質能力について捉え直したりする機会となった。
 - ・家庭学習強調週間、姿勢指導、道徳の評価についての情報提供など、部会の成果を3校の全児童生徒や教職員に還元できた。

- 課題
- ・部会での話し合いの内容や成果物について、各学校の先生方へ周知したり、児童生徒へ配付したりしていくことで、教職員も児童生徒も小中一貫の意識が高まっていくと考える。今後は、全ての部会の取組の成果物を広く共有していけるようにしたい。
 - ・部会によって内容の違いは出てしまうが、一人一人の負担感のないような取組を考えていきたい。



祇園小理科実技研修に緑小・二中授業研究チーム参加



小中相互授業参観